

受難の主日

2010.3.28

今日受難の主日の典礼は、イエスのエルサレム入城を記念する枝の行列に始まり、ミサの中では今、十字架の死に至るイエスの最後の道行きが朗読されました。同じ主日の典礼の中で朗読される二つの福音の場面は、あまりにも極端なその落差のゆえに、私たちを圧倒します。旧約の預言者が告げていた通りのお姿で、ロバの背に乗ってエルサレムに入城されるイエスを、人々はホサンナの声も高らかに、熱狂的に歓迎しました。しかし、その数日後、人々は同じイエスを目の前にして、「十字架につけろ、十字架につけろ」と叫ぶのです。イエスにつき従ってエルサレムに入った弟子たちは、周囲の人々のイエスに対する態度の豹変振りに、あの嵐の夜の湖で経験したような、この世の終わりとも思える動揺を経験させられることになるのです。

イエスにつき従った弟子たちが、イエスのエルサレム入城からその十字架の死に至る数日間に経験したことは、しかし、考えようによっては、あの時、弟子たちだけが経験することになった特殊な体験ではないとも言えます。この世の人々の心の移ろいややすさがもたらす残酷さと、その中に生きざるを得ない一人ひとりの人間の運命の過酷さは、この社会に生きる経験を積んだ人なら、誰にでも思い当たる人の世の姿ではないでしょうか。イエスはまさに、そのような人の世の毀誉褒貶の世界に生き、人々に見捨てられた孤独のうちに十字架の苦悶の死に至る人生を歩んでくださったのです。イエスにつき従ってきた弟子たちが、イエスのそのような運命に直面することによって動揺し、結局は十字架の上にイエスを見捨てて逃げてしまったのは、彼らの信仰が、人々の心の移ろいややすさがもたらす人の世の残酷さと、それに巻き込まれて行く自分たちの師であるイエスの過酷な運命を直視することに耐えられるほどには成熟していなかったからです。けれども、私たちの誰が、そのような弟子たちの信仰の不甲斐なさを責めることが出来るのでしょうか。

復活されたイエスが、人々を恐れて部屋の鍵をかけて閉じこもっている弟子たちのもとに現れたとき、「あなたがたに平和」と言われて、彼らの失態を一言も非難されないのは、この世に生きる者たちにとって、周囲の状況の如何に関わらず信仰を貫くことが如何に困難であるかということ、イエスご自身がよく知っていてくださる証です。イエスご自身、ゲッセマニのあの苦悶の祈りの中で、十字架の上での、御父にも見捨てられたとの悲痛な叫びの中で、一人の人間として、ひたすら父なる神のみ旨に従って生涯を全うすることの困難さを、身をもって体験しておられるのです。それゆえに、復活されて弟子たちのもとに戻って来られたイエスは、弟子たちの信仰の未熟さとその結果としての彼らの裏切

りを責めることはなさいません。けれども十字架の死に至る運命を御父のみ旨として受け入れ、父なる神の子としてのその生涯を全うされ、御父の全能の力によって死者のうちから復活されたイエスは、弟子たちの信仰を未熟なままに放置されることもなさいません。復活のいのちの息吹を弟子たちに吹きかけることによって、今なお挫折の苦しみの中にある弟子たちを奮い立たせてくださるのです。イエスを十字架の上に見捨てて逃げ出してしまったあのことは、今や弟子たちにとって、胸かきむしられるような痛恨の挫折の経験ではなくなつたのです。あの挫折の経験によって弟子たちは、信仰とは何かを学んだのです。復活の主がそのことを学ばせてくださるのです。

人々の熱狂の中に身を置いて、自分もホサンナと叫ぶことはそれほど難しいことではありません。けれども、イエスが言われたように、自分の日々の十字架を背負ってイエスの後に従い通し、私たちに先立って、十字架の死の暗闇を打ち破って復活された主イエス・キリストの復活のいのちの恵みにあずかることこそが、私たちの信仰における人生の課題なのです。

イエスのエルサレム入城と十字架の死において露わになった、人の心と人の世の移ろいやすさ、頼みがたさを超えて、それに踊らされることなく、与えられた自分の人生を、神のみ旨が求めている自分の生き方を貫いて生きる、ここにイエスが示してくださった、イエスの従う者たちの生き方があります。そして、そのような生き方を支えきることが出来るだけの信仰を、この世の、人の心の移ろいやすさがもたらした十字架の死に打ち勝って復活された主は私たちの中にも吹き入れてくださるのです。

そのような信仰の恵みを願って、主イエスの十字架の死と復活の過ぎ越しの記念を祝うこの日々、ともに祈り求めて行きたいと思ひます。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高